

緋のきぬにつゝみてありし母上のますみのかゞみいはれありなむ
紅さして鏡みし舊のをとめ子のわかさぞいまもなつかしまるゝ
をさな子は母の心の鏡をとおもひてわれはをのゝきにけり
母上のかゞみの面にいきをかけいろはをかきし昔なつかし
いざはやく鏡とうでゝ七尺の黒髪すかせ秋來といふに

あはれなるはなはなとてふもなほなほとてふもなほとてふもなほとてふも
あはれなるはなはなとてふもなほなほとてふもなほとてふもなほとてふも
あはれなるはなはなとてふもなほなほとてふもなほとてふもなほとてふも
あはれなるはなはなとてふもなほなほとてふもなほとてふもなほとてふも
あはれなるはなはなとてふもなほなほとてふもなほとてふもなほとてふも
あはれなるはなはなとてふもなほなほとてふもなほとてふもなほとてふも
あはれなるはなはなとてふもなほなほとてふもなほとてふもなほとてふも
あはれなるはなはなとてふもなほなほとてふもなほとてふもなほとてふも
あはれなるはなはなとてふもなほなほとてふもなほとてふもなほとてふも
あはれなるはなはなとてふもなほなほとてふもなほとてふもなほとてふも

感想

富津より

つくし

私はこのまゝ足音丈をのこして、歩いてゝ知らぬ
國に行つてしまひませうかしら。

外海へ出る道は砂丘が一寸の間つゝきます。ちよ
つとした草や木がありますけれども、私は何故かこ
れを砂漠の様に考へ、そこをどぼ〜と旅する自分
の影のうすさをしみ〜眺めてゐました。砂丘のく
づれた所に野苺がよく熟れてゐます。あなたはし
み〜これを味つて御覽になつた事が御座いまし
て、ポツツとかむと細かい種が快よく齒にあたつ
て、一寸酸いのはどうしても野の味ですね。河原撫
子が薄に似た細い草の中になよ〜と咲いてゐま
す。赤い鳥井のお稻荷様を右に見て、十間許行けば
紺青の海が手を開いてバアといひそうです。つま
だつと、ころがつてくる白い波頭が此から泳がうと
する私の心を強く促へます。帽子を少し氣取つて冠
つて海の中にとびこんでゆく私を想像して見て下
さい。

○ 富津は唐茄子の名所です。朝霧の中から形のよい

まち子様

私は今海岸をあるいてゐます。いつになく早く眼
が覺めましたので、氣持よく寢入つてゐる皆をすて
、一人外に出ました。はだしで踏む細かい砂はひん
やりとして足から頭の奥まで冷さがしみこみます。
こゝは内海で寄せる波といふ程の波は見せたくもあ
りません。たゞチイツと耳をすませてゐますと、か
すかにチャブ〜と波同士がいかにも人に憚つて
お話でもするかの様にさ〜やいてゐます。たそがれ
や、小狐貝や、蜀紅錦といふやうな貝が露にすんぶ
りぬれて、ぼち〜こぼれてゐるのも静な朝にふさ
はしう御座います。沖の白帆が動くともなく動いて
いつか小さく姿をかくしてしまひます。自分の足音
のびたびたといふのだけ聞えるやうな静さです。

大きな黄色い花を見て、この時はど唐茄子の花に心をひかれた事はありませんでした。よく見ればなかに整つた花ですね、花といへば露草はふるひつきたい様なフレッツシユな色をしてゐます。空の端がどうかした拍子に地に落ちて出来た花ださうです。その故かみんな仰向いて空を戀しがつてゐます。眞珠の様な露の玉は人にかくれて泣く、戀しさの涙なのかもしれない(この想像は少し厭味ね)濱ひるがほや、鬼百合や、大根に似た何とかいふ花や、藪かんぞうや一足踏み出せばいろんな花のあるこの地はうれしう御座います。人間の文明を遠くながめてゐる當地にも自然は大きな恵を下さるのです。ふだん私共はちつともこんな事をありがたく思つちやゐませんけれども、杉菜に置いた露一つにも、人間の眞似の出来ない巧みさを持つた自然がいろんな花を咲かせて、旅にゐる私たちの心の糧を豊にして下さるのをおろそかに忍ばずにおられませうか、私を慰めてくれる草にも木にも一々お辭儀がしたくなりまして。もう二日で歸ります。

□

□

鎌倉から箱根へ (一)

文三時

雨

六月二日。七時少し過ぎて江の島を出發した、えびすやの前で〇から張く手を握られた時はさすがに悲しかつたが宿の窓からひれならぬ手巾を振る友をみかへりながら例の橋を渡る頃はもう嬉しかつた。一行はN先生H先生の他九人。昨日迄の騒しい旅に比べてしんみりとして旅らしい感じがする。電車を長谷で下りて先づお観音様に詣る。餘り丈の高いお観音様は二本の弱い蠟燭の火ではお顔がみえぬ。何時か誰かゞ沙翁の作物はわからないから有難いのだと云つた、そのお観音様は見えぬから有難いのだなど早合點した。お堂の前に大きな銀杏の木が一本「銀杏の木はすぐ公曉を思ひ出しますねえ」とおつしやつたのはH先生。

大佛様は京都のよりも奈良のよりもよい印象を與へた。鎌倉やみ佛なれど釋迦牟尼は

美男におはす夏木立哉

それより以上云ふ事はない。

又電車で春福寺に行く。文より質に外形より内容に重きを置いた鎌倉武士の心は鎌倉五山が最よくシンボライズしてゐると思つた。鎌倉の和かな山と淡白でしかも情味のある町の感じがふと鎌倉武士と中世のナイトを思はせた。

停車場前の一茶亭に食事の後鎌倉と最後の別れをつげた。汽車を大船で乗りかへた時に某先生を迎へた。じつとしてゐればうちまでも行かれる汽車を國府津で棄て、電車に乗る。今の小田原町を通りぬけると昔の小田原宿に入る、藁ぶき屋根の軒の低い家の列んだこの町の中を電車にのつて通るのは餘り慘酷だと思つた。町を出ると早川の岸になる。清流に糸をたれてゐる風流子に去年の夏父と太田川の釣釣りに行つた事を思ひ出た。湯本につく。電車はこゝまでしか進まない。H先生にお別れして先づ早雲寺に行く。後北條氏五代の墓は苦むしかたむいてみるかげもない。鎌倉以來かうして苦むした墓をみる度に何故墓なんか作るかを疑つた。生れたら生きればよいので死んで後まで生きた日のかすなごを残す

にも及ぶまいにど。

早川溪谷に沿つて上る道が進むにつれて谷は深く深々の響はいよ／＼高くなる。昔の水準のあとが山の中腹に一段同じ高さに削られて残つてゐるし此邊の山のまる／＼してゐるのは昔の湖の水が溢れてそれを被つた爲だとN先生はおつしやつた。「桑田變じて海となる様がまざ／＼見えてあさましい。」この道で數々横柄な自動車に埃をかけられた。人を馬鹿にした様な音を立て、人を追ひ散らし舉句に後足で埃をかける。「文明もそれまで進めば澆季の至り」遠くから地響が聞えるともう戦慄せずにはゐられない。大平臺邊りから大分山らしくなつて向ふの林とこちら森との鶯が鳴きはしてゐる。路端にルビーの様な色をした木毒が實つてゐる。まもなく宮の下に入る。宮下はバタ臭い町で何かホテルが列んでゐる。その間に外人向のお土産品を賣つてゐる家がある。宮下に續いて底倉がある其口につたやは有つた。先に居らしたH先生に御挨拶もそこ／＼同勢十人温泉に飛び込んだ。愉快、愉快、實にその愉快さはその十人きり味ふ事は出来まい。浴室の窓のそば